



双塔

カトリック新潟教会

2017年2月
No. 345

格子のようなアロンの手

主任司祭 ラウール・バラデス

主があなたを祝福し守ってくださいますように。

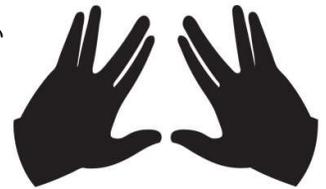
主があなたの上にみ顔を輝かせ、顧みてくださいますように。

主があなたにみ顔を向け、平安を与えてくださいますように。(民数記 6:24~26)

このことばをもって祭司は神からの祝福をイスラエルの民の上に願っています。レビ記(9:22)に記されているようにアロンは民に向かって手を伸べて、民を祝福していました。ところが、手の平をどの形にしていたのでしょうか。

右の画は伝統的な形を示します。ユダヤ教の教典に様々な解説が記されていますが、多くの文献によれば祭司の手は窓につける格子のようなものです。

「わたしのいとしい方は、わたしたちの壁の後ろに立って、窓から
のぞき、格子越しにじっと見つめておられます。」



イスラエルの教師たちは、アロンの祝福を雅歌 2:9 に合わせて解釈を探ります。壁、窓、格子の意味について時代と状況において様々な解釈が述べられます。

「永遠の愛の歌」[1]によれば壁とは人間の罪にたとえられます。しかし、「神はこの壁のうしろに居て、花嫁の合図、私たちの呼びかけを待ち構えて、すぐにも介入して救おうとされる。探し求められるために、ご自分の姿を隠しておられる。」

さらに、「『格子越しにじっと見つめる』—— 主は、祝福のために高く上げられた祭司の手を通して、花嫁である共同体の美しさに見入っておられる。」(雅歌のタルグム)

この解釈にしたがって、ユダヤ教の祭司は、祝福するさい、少し指の間を空けています。—— それは花婿である主が、花嫁の美しさをじっとご覧になるためです。

以上「永遠の愛の歌」で紹介される解釈です。

考えてみれば、毎年、元旦のミサの第1朗読は祭司の祝福です。一年中、神の救いを探し求めることができるように教会は祈っています。神様との間に私たちが罪という「壁」を造り、同時に人間同士の「壁」が神との「壁」になってしまいます。花嫁を待っている花婿のように、神様が私たちに待っておられます。私たちの美しさをじっと見て、待っておられます。それは、罪のゆるしを受けて新たにされた美しい心。相手をゆるし、受け入れる人の美しい顔。無関心の壁を越えて教会の仲間と一緒に働き、苦勞する人の美しさ。健康に恵まれていなくても、忍耐と希望をもって周囲の人と共に歩む人の美しさ。主日に少し無理しても教会に集まって、賛美と感謝を歌う人の美しさ。家族と社会の中で神の愛を証する人の美しさ。

私たちが勝手に立てたすべての壁の向こう側に、雅歌の花婿のように神様が待っておられます。アロンの手を通し、格子越しにじっと、花嫁の合図を待って、私たちが本来持っている美しさに立ち返るよう恵みと力によって助けてくださるのです。[1]「永遠の愛の歌」マグダレナ・E・トーレス・アルピ著



そよかせ便り



■ 主の降誕夜半ミサ ---- 12月24日(土) 20:00 ----

祭壇には花びらの先がピンクの薔薇をアレンジした花が飾られ、コスタリカ出身のA Jさんが奏でる「しずけき」のチェロの音が聖堂内に響いた。会衆が持つろうソクの灯りの中でイエス像が馬小屋に安置された後、ミサが捧げられた。司教様は説教で「主イエス降誕の祝いとは、生命の尊厳の意味と神の望まれる世界の実現について考えることである」と話され「最近では平和の破壊、生命の危機を感じる。原因は人間の謙遜さの欠如と他者への拒絶と排除、無関心である」、「私たちは、生きる意味を考えると来ているのではないか」と呼び掛けられた。ミサ後には、センター前や室内に温かな飲み物やお菓子が用意され、聖堂から出てきた人々が歩を止め、笑顔で言葉を交わしていた。また、クララ会手作りのクッキーが販売され、売上金は東日本大震災の被災支援に寄付された。

■ 日中ミサと祝賀会 ---- 12月25日(日) 9:30 ----

午前零時の深夜ミサは30人を超す人たちが集まって捧げられ、朝9:30からは日中のミサが捧げられた。司教様は、カリタスで行った戦略計画の策定作業の説明(過去の振り返りに基づき将来への道筋を明らかにする作業)をされた後、「私たちがみことばを告げる使命を、勇気を持って生きることができるように祈りましょう」と結ばれた。ミサ後は祝賀会が行われ、センター2Fに用意された120席は満席!英語ミサの方々の歌あり、青年らが会場全員をリードする合唱あり、最後は賞品を掛けたジャンケン大会が行われた。みんなの食欲も全開で、青年らが夜なべで揚げた8kgの鶏のから揚げや大鍋で煮込んだスープはほぼ完食であった。

■ 世界平和の日のミサ、新年の挨拶 ---- 1月1日(日) 11:00 ----

2017年の最初の日を神の母聖マリアに捧げると共に、「世界平和の日」を記念するミサが菊地司教様の司式で執り行われ、小雨にもかかわらず40名以上の参加者があった。

薄日が差す11時から、帰省中の方々や和服姿が目立つ聖堂で、ラウル神父様の司式でミサが捧げられた。神父様は説教で「喜びのときも涙のときも神に呼び掛け、神に出会うきっかけがある1年を過ごしましょう」と私たちの心の居住まいを正された。ミサ後はセンター1Fに新年の祝賀会が行われた。フラッペやお茶が用意された会場には「おめでとうございます!」の挨拶が交わされ、笑顔と笑い声であふれていた♪

